

島根大学 ラフカディオ・ハーン研究会 ニューズレター 第3号

編集：島根大学ラフカディオ・ハーン
研究会事務局
住所：〒690-8504
島根県松江市西川津町 1060
島根大学法文学部 長岡研究室
発行：2015年5月16日

【 研究小論 】

『日本瞥見記』の謎を追って

—Lafcadio Hearn at work on *Glimpses of
Unfamiliar Japan*—

事務局長 横山 純子

私の研究はラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn, 1850-1904) の作品の創作過程の研究が中心である。これまで恩師銭本健二先生の勧めでヴァージニア大学バレット文庫 (Clifton Waller Barrett Library of American Literature, Special Collections, University of Virginia) 所蔵のメモ帳、原稿等を辿りながら、メモ帳、原稿、(記事)、作品等の作品の創作過程を研究対象にしてきた。広島大学大学院社会科学研究所修了時の博士論文で日本時代に第一作目の『日本瞥見記』 (*Glimpses of Unfamiliar Japan*) の創作過程に関して考察した。それは第一に、『日本瞥見記』の過程が、ハーンの装飾的文章から単純化した文章への変化と関わりがあるからである。ここでの創作過程とは推敲過程だけでなく、アメリカ時代の影響を含めて広い意味で述べている。日本だけを視座に置いていたのではその意味を見極めることはできないと考える。ハーンはヨーロッパから大西洋を越え、アメリカに新天地を求め、そして太平洋を越えて日本に渡ってきた。そうした西洋から東洋へ、物質文明社会から日本の精神世界への遠い旅の果てに日本時代の創作が生まれてくるからである。またチェンバレン等との手紙のやりとり等に見られる創作の経緯と版の変遷の経緯についても検討した。第二に、『日本瞥見記』にはヴァージニア大学図書館バレット文庫や松江の小泉八雲記念館所蔵の創作過程をたどるメモ帳、新聞記事等豊富な資料があり、日本につい

での第一印象がみずみずしく語られており、その創作過程をたどることは興味深いからである。

ハーンは1889年11月28日付けの『ハーパーズ・マンズリー』 (*The Harper's Monthly*) の美術主任記者であるウィリアム・ハードマン・パットン (William Hardman Patten, 1865-1936) に宛てた手紙の中で、「全く新しいことを発見することは望めないし、それは賢明な試みとは考えられないので、できるだけ新しい方法で物事を考えたいのです」 (“I could not hope—nor would I consider it prudent attempting,—to discover totally new things, but only to consider things in a totally new way, as far as possible.”) (Tinker 328) と述べている。『日本瞥見記』では他の日本に関する著作と題材は同じものを扱っているが、その描き方には独自のものがある。また、同じパットン宛の手紙の中で、“life” と “colour” とを作品に加えて “vivid sensation” を読者に与えたいと述べている (Tinker 328)。「生氣」 (“life”) と「色」 (“colour”) とは文字通りの意味ではないと思われ、修士論文以来これが何を意味しているか謎だった。そしてここでいう “life” と “colour” を作品に加えるとは、単に描写するだけでなく、できるだけ一般の人々の生活の中に入って、内側から描写することであったと考えるようになった。

また博士論文を通して単に表現の変化を追うだけでなく、ハーンの影響や異文化理解等ハーンの内的側面の考察も創作過程を探求する上でも欠かせないと思うようになった。彼は日本を美化し過ぎていると批判をされたりするが、彼の作品には西洋の読者を意識した脚色があり、彼には日本にきた当初から東洋と西洋との間で葛藤をしていたようである。1891年の松江からエルウッド・ヘンドリック (Ellwood Hendrick, 1861-1930) 宛書簡の中で次のような心境を明かしている。日本では文筆活動はハーンにとってかなり困難であり、その理由としてその周囲の「心理的雰囲気」 (“mental air”) が西洋の思考習慣を完全に崩壊させる影響を及ぼし、「強い感情」 (“strong emotion”),

「スリル」(“thrills”)、「インスピレーション」(“inspirations”)が起こらないと述べている(*Life and Letters* vol. 2 60)。1891年10月の松江からのヘンドリック宛書簡の中でも、「私の火のペン」(“my pen of fire”)(*Life and Letters* vol. 2 63)に言及し、それを失い、役に立たず、火そのものがないと述べている。そしてそこにはハーンの心を魅了した熱帯もなく、「ここは全く柔らかく、夢のような、静かな、青ざめた、微かな、優しい、霞のかかった、水蒸気の立ちこめた、幻のようです」(“It is all soft, dreamy, quiet, pale, faint, gentle, hazy, vapoury, visionary,...”)(*Life and Letters* vol. 2 63)と強烈なインパクトのなさを強調している。日本の風景に、ハーンは心を和ませながらも一方で、熱帯のような強烈なインパクトを求め、物足りなさを感じていたことも想像できる。彼は日本にきた当初から日本に違和感を抱き、創作をめぐる葛藤を内包していたのである。宇野邦一は『ハーンと八雲』の中で、ハーンは「混血的存在」になろうとした人で、それは必然的に「二つ以上の世界の間で引き裂かれて、その葛藤を生きつづけること」(98)であると述べている。ハーンは日本に溶け込もうと努めながらも完全には溶け込めず、西洋文化に反発しながらも根は西洋人であり、日本と西洋の二つの文化の狭間で葛藤を続けることになるのである。作品の字面に捕らわれず、そうした彼の心象風景を加味して作品を読んでいくことが大事だと思うようになった。今後はハーンや他のアメリカ文学のいろいろな作品に視座を広げてそれを実践していきたいと思っている。

研究すべきことはまだまだ沢山あると思うので、これからも精進していきたいものである。

参考文献

- Hearn, Lafcadio. *Glimpses of Unfamiliar Japan*, 2 vols. Boston & New York: Houghton, Mifflin Co., 1894.
- . Bisland, Elizabeth ed. *The Japanese Letters of Lafcadio Hearn*. Boston & New York: Houghton, Mifflin Co., 1910.
- . Bisland, Elizabeth ed. *The Life and Letters of Lafcadio Hearn*, vol. 1. Boston & New York: Houghton, Mifflin Co., 1906.
- . Bisland, Elizabeth ed. *The Life and Letters of Lafcadio Hearn*, 2 vols. Boston & New York: Houghton Mifflin Co., 1906.
- Tinker, Edward Larocque. *Lafcadio Hearn's American Days*. London: John Lane the Bodley Head Ltd., 1925.
- 宇野邦一『ハーンと八雲』東京：角川春樹事務所、

2009.

- 銭本健二・小泉凡共編「ラフカディオ・ハーン年譜」『ラフカディオ・ハーン著作集第15巻』東京：恒文社、1988, pp. 533-777.
- 築島謙三『ラフカディオ・ハーンの世界観』東京：勁草書房、1964, 1985.
- 平川祐弘監修『小泉八雲事典』東京：恒文社、2000.

【ハーンとわたし】

へるんさんと私

常松 窈子

私は昭和23年-25年にかけて松江城と堀川の傍らにある小学校に通っていました。堀川の向かい側には昭和8年に建てられた白亜の鉄筋コンクリートで造られた小泉八雲記念館と小泉八雲旧居が並んで建っていました。

記念館の前には長方形のプールがあり白い建物に反射してキラキラと輝いていました。放課後になると私は友人と「へるんさんの庭へ行こう!」と声を掛け合って遊びに行っていました。遊びと言っても狭い庭でゴム跳び、缶蹴り、そして水藻を掬ったりしてごく日常の遊びでした。

その頃はへるんさんがどんなに立派な人物で、世界に日本を紹介した人であったことなどは全く知らない子供でした。年を経てワシントン DCにあるリンカーンセンターの前のプールや、アメリカのナッシュビルにあるエルビス・プレスリーの記念館の前の長方形のプールを見たとき、その大ききこそ違っていますが、私の記憶の中で共通なものを見た嬉しさが全身をよぎりました。

へるんさんは松江が大そう気に入っていたようで、友人と殆ど毎日お城へ行き二の丸から松江の町を眺めたり、当時市民の憩いの場であった茶店でお茶を飲んだり周辺を歩き、短い松江での生活を楽しまれたようです。

小学校、中学校ではへるんさんの作品を読み、ゴーストストーリーは怖いながらも楽しく、また高等学校になると英語の授業で数編を悪戦苦闘しながら読んだのを思い出します。その頃読んだ物語は、「耳なし芳一」「むじな」「水あめを買う女」「かきつばた」等でした。

その後大学生になると興雲閣で大学の先生、高等学校の先生の指導でへるんさんの作品を読む会が始まり、毎週土曜日の午後は興雲閣へ足を運びました。今にして思えば僅かなお礼で毎週勉強出来たことはとても有難く良い思い出になっています。

私はMGGという組織のメンバーになり観光ガ

イドとして微力ながら活動を始めて 27 年になります。国土交通省の傘下であり、特に松江城、小泉八雲に力を入れて外国の方の案内をしています。へるんさんのことを知らない方が多く残念ですが、へるんさんが愛した松江を知ってもらい、へるんさんが何故松江を愛したのか私なりに伝えていきたいと思っています。

【 読書会に参加して 】

雑感—“Yuki-Onna”について

事務局長補佐 阪本 成子

2008年9月から2009年2月に、八雲会主催「市民と親しむハーン：小泉八雲をよもう」という常松正雄先生による市民講座を受講しました。とても人気の講座で毎回50名くらいの参加者があり、先生の分かり易い説明と様々な資料、先生自ら朗読もしていただき、ラフカディオ・ハーンの魅力を存分に楽しむことができました。その時のテキストは田代三千穂訳『怪談・奇談』（角川文庫）で、「耳なし芳一のはなし」「雪女」「お貞のはなし」など9作品が6回に渡って取り上げられました。私は原文でも読んで見たいと思い、読んで見るとハーンの簡潔でドラマチックな文章にいきいきと読み進むことができ、すっかりハーンのとりになっていました。原文からは、翻訳とは違う、ニュアンスなどを感じ取ることができ、よりハーンの心に触れた思いがしました。

さて、常松先生のお話から、ハーンのそれらの怪談は、英語で、西洋の読者に向けて書かれたことを知りました。そして、特に「雪女」について、武蔵の国のお百姓さんから聞いた話を、彼自身が創作して“Yuki-Onna”となったことを知りました。次は“Yuki-Onna”からの引用ですが、私はこの一節に大変新鮮な感覚を覚えました。

One evening, in the winter of the following year, as he was on his way home, he overtook a girl who happened to be traveling by the same road. She was a tall, slim girl, very good-looking; and she answered Minokichi's greeting in a voice as pleasant to the ear as the voice of a song-bird. Then he walked beside her; and they began to talk. The girl said that her name was O-Yuki;(中略) Minokichi soon felt charmed by this strange girl; and the more that he looked at her, the handsomer she appeared to be. He asked her whether she was yet betrothed;

and she answered, laughingly, that she was free. Then, in her turn, she asked Minokichi whether he was married, or pledged to marry; and he told her that, although he had only a widowed mother to support, the question of an “honorable daughter-in-law” had not yet been considered, as he was very young.... After these confidences, they walked on for a long while without speaking; but, as the proverb declares. *Ki ga aréba, mé mo kuchi hodo ni mono wo iu*: “when the wish is there, the eyes can say as much as the mouth.” By the time they reached the village, they had become very much pleased with each other;(中略) She remained in the house, as an “honorable daughter-in-law.”¹⁾

雪女のお話は、日本全国、雪深い地方でいろいろな形で言い伝えられており、現在は、再話の形で出版されて絵本や本となって子どもから大人まで読むことができます。私は、常松先生の講座を受けた当時、小学校や幼稚園など、子どもたちに昔話を語るボランティアを実践していました。そして「雪女」も友人の語り手が素敵に語るのを聞いて、『松谷みよ子のむかしむかし 3』（講談社、1977）、稲田和子・筒井悦子著『子どもに語る日本の昔話』（こぐま社、1995、1997）などから異なった「雪女」のテキストを集めて私も語れたらなあと思っていたところでした。

そこへハーンの“Yuki-Onna”を読んだところ、上記に引用した部分があり大変興味深く思いました。それは、私の知る限りでは、古くから日本で語り継がれている雪女の昔話にはない部分だったからです。昔話では、吹雪の夜に泊まった小屋で雪女に襲われて老人の方が亡くなる悲劇に見舞われてから、次は、吹雪の夜に、突然美しい女が箕吉を尋ねて来て、一緒に住むようになります。これが、昔話のパターンです。しかしハーンの“Yuki-Onna”には、二人がどのようにして魅かれ合うようになったのか、丁寧に描かれています。これはハーンが単に聞いた話を英訳したのではなく、ハーンが十分に考えて加えた創作部分だと思います。これを読んでいるうちに、ハーンとセツさんのことが重なり、私は大いに想像を膨らませていました。そして、きっと、西洋の読者にはこの主人公の二人が夫婦になるまでの心の過程描写が必要だったのではないかとも思いました。

注

1) *Kwaidan*, pp. 114-116.

参考文献

Hearn, Lafcadio. *Kwaidan* Rutland, Vermont & Tokyo: Charles E. Tuttle Co., Inc., 1971.
———.田代三千稔訳『怪談・奇談』東京：角川書店, 1956.

【 読書会の記録 】

2014年11月～2015年4月の読書会 事務局長 横山 純子

第66回例会

日時：2014年11月8日(土) 総会后 15:00～16:00
会場：島根大附属図書館2階 ラーニング・コモンズ2

テキスト：“From the Diary of an English Teacher” p.470,l.7～ p.471, l.21

参加人数：15名

第67回例会

2014年12月20日(土) 14:00～16:00

島根大附属図書館2階 ラーニング・コモンズ2
前述のテキストの p.471,l.21～ p.475,l.30

12名参加

第68回例会

2015年1月31日(土) 14:00～16:00

島根大附属図書館2階 ラーニング・コモンズ2
p.475,l.32～ p.481,l.19 13名参加

第69回例会

2015年2月21日(土) 14:00～16:00

島根大学学生市民交流ハウス
p.481,l.20～ p.486,l.3 11名参加

第70回例会

2015年3月14日(土) 14:00～16:00

島根大学学生市民交流ハウス
p.486,l.4～ p.490,最後まで 15名参加

初めに、2014年8月2日～8月11日に Matsue-Nola Tomodachi Exchange Program でニューオーリンズ旅行に参加された永瀬直子さんに写真をホワイトボードに映しながらニューオーリンズ旅行について話してもらった。ハリケーン、インディアン、ジャズ、マルディグラ、墓、ハーン等をキーワードに興味深い発表をされた。ハーンの住んでいた家にも行かれたそうで、当時と変わっていないその家の壁と床も撮影しておられた。(右掲載写真) この日で“From the Diary of an English Teacher”を読み終えた。

謝辞：発表してくださった会員の永瀬直子氏とプロジェクトの設定をしていただいた島根大学大学院教育学研究科の勝部昂介氏に感謝致します。

第71回例会

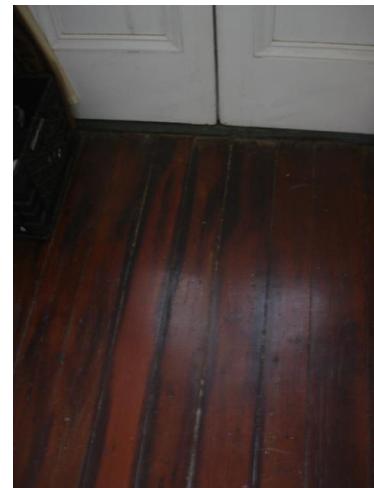
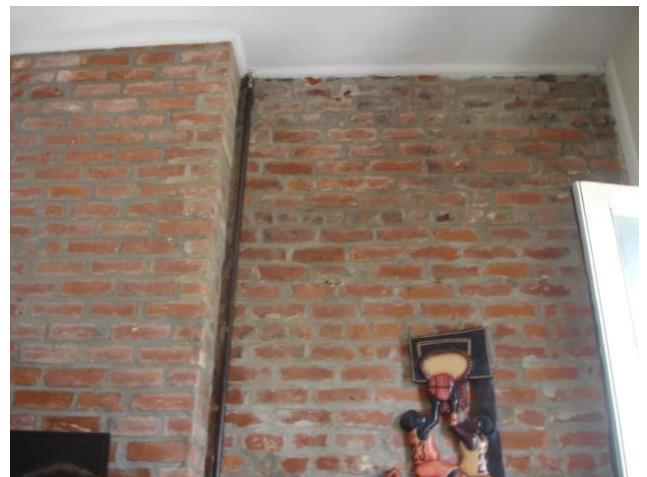
2015年4月11日(土) 14:00～16:00

島根大附属図書館2階 ラーニング・コモンズ2

“Kitzuki: The Most Ancient Shrine of Japan”
p.172, 冒頭～p.175, l.25 11名参加

“Kitzuki: The Most Ancient Shrine of Japan”を読み始めた。読んだところの描写で常松先生がハーンはいろんな体験を重ねて書いていると言われたが、私も他の描写のところでそれを感じたことがある。ハーンは紀行文であつてもちょっと脚色を加えて自分の体験を凝縮して作品に書き込んでいると思う。

皆で話をしながら読んでいくといろんなことが見えてきてそれが読書会の楽しさだと感じる。ぜひ興味ある方は読書会に奮って参加してください。



ハーンの住んでいた 1565-67 Cleveland Ave. の
家の壁とその床： 両方とも永瀬直子氏撮影

編集後記：3号をお届けいたします。3人の会員の皆様にはそれぞれ大変興味深い原稿をお寄せいただき有難うございました。私たちの会誌が着実に歩みを重ねていることに喜びを感じています。(高橋栄)